

「黒い雨」被害者切り捨て

国は核被害の実相を見よ

米軍による広島への原爆投下から67年の今夏、「被爆者」と認められるはずの「黒い雨」被害者は切り捨てられた。厚生労働省の有識者検討会は7月、あまたある証言を無視して黒い雨の援護対象区域拡大を否定し、政府もそれを追認した。爆心地から幾重も山を越えた集落を訪ね歩き、原爆の影を背負って生きる人々の話に耳を傾けながら、私は何度、広島の方角の空を見上げただろう。核被害の実相に向き合えない政府に「被爆国」を名乗ってほしくない。

「うそを言うところんじゃない。事実はあるんじゃないから」。1945年8月6日、広島市の爆心地から約15キロ西の祖父母宅近くで、女性(76)は黒い雨を浴びた。神社で遊んでいると「痛いぐらい」の大雨が降り、その後、毎朝のように目やにが止まらなくなり、爪はぼろぼろに。30代半ばで甲状腺の病気を患い入院、白内障の手術も3回受けた。

山あいの集落で聞いた住民たちの

情景説明は生々しかった。爆風で飛んできた商店の伝票。シャツや帽子についた雨の黒いシミ。雨にぬれた乳飲み子の頭を拭いて着替えさせたこと。女性の祖父は、しばりの作業中に雨に遭った。鎌が滑って切れた手から血が流れた。祖父は「普通の雨じゃない。油のようだった」と話したという。証言は細部まで具体的に偽りは感じなかった。取材した後、女性から「記事にしてほしくない」と切り出された。30年近く前、幼くして白血病で命を落とした孫のことが頭に引っかかっているからだった。孫の入院先から「原爆に遭ってない？」と長女が電話をしてきた時「遭ってないよ」と答えた。孫の病気は自分が黒い雨に遭ったせいなのか。親族からそう思われるのではと考えると気持ちも揺らぐ。匿名を条件に話を聞きながら原爆が心身に刻んだ傷の深さを思った。

科学的な立証を求める理不尽さ

国の被爆者援護の歴史は被爆から12年後の原爆医療法施行に始まり、地域の拡大や手当の創設・拡充が順次実施された。黒い雨を巡っては1

976年、広島市の爆心地付近から北西に長さ19キロ、幅11キロの楕円(だえん)状の地域が援護対象区域に指定された。区域内にいた人は無料で健康診断が受けられ、特定の病気が見つければ被爆者健康手帳が交付される。しかし、厚相(当時)の私的諮問機関「原爆被爆者対策基本問題懇談会」は80年の意見書で、新たな被爆地域の指定には「科学的・合理的な根拠がある場合に限る」とした。この後、地域の拡大は一度もない。時間の経過に加え、そもそも被害者側に科学的立証を求めるのは無理がある。

広島市などは08年、被爆者の高齢化を受けて「最後の機会」と位置づけた大規模なアンケートを実施した。その結果から援護対象区域の6倍の広さで黒い雨が降ったと主張し、10年、区域拡大を政府に要望した。これを受け同年末から厚労省の有識者検討会が始まった。全9回の会合をほぼ毎回取材したが、審議は「結論ありき」としか思えなかった。ある委員は、放射線の影響を認めることは「疫学的な誤診」と発言し、「学術的に厳密な判断を求めないと、とんでもない病気をつくってしまう」

とまで言った。私には認めない理屈をあえて付けようとしているとしか見えなかった。「現地を訪れて体験者の声を聞いてほしい」という地元の訴えも黙殺された。

背を向けたまま被爆国を名乗るな

援護対象区域拡大を訴えてきた「広島県『黒い雨』原爆被害者の会連絡協議会」は今夏、54人分の証言集「黒い雨 内部被曝(ひばく)の告発」を刊行した。がんなど病気の苦しみとともに「死ぬのを待ちよるのか」など国への憤りがつづられている。証言を寄せた森園カズ子さん(74)は広島市安佐北区は甲状腺の病気を長年患い、だるさとも闘う。「私らみたいなのは置き去りですよね」。私は返す言葉がなかった。被爆者健康手帳の所持者は今年3月末現在、全国で21万8300人いるが、手帳を取れない「被爆者」の存在を忘れてはならない。援護区域の外側で黒い雨に遭った人だけではない。焦土で家族や知人を捜したり、郊外で負傷者の救護活動に携わった人も、放射線を浴びた。その事実を証明できないなどの理由で、申請を却下された人は多い。

隠された「被爆者」の存在に触れる。今も残る原爆被害が身に迫り、被害を救おうとしない「被爆国」に悲しさを感じる。福島第1原発事故後も、国は核被害の原点である被爆地の現実を背を向けたままだ。「切り捨て」の歴史に終止符を打つために、私は真実を語る「被爆者」の側から告発を続けたい。(広島支局)

生まれ変わるのつもり

“福島人”

中手聖一
子どもたちを放射能から守る福島ネットワーク
の前代表。



岩波書店の『世界』4月号より

普通の顔をして暮らしている

いま福島を訪れた人は一様に驚く。みんな普通に暮らしている……。」と。まるで何事もなかったかのよう。人々が何の防護もせず街を歩き、時に聞こえてくる子どもたちの遊び

声に戸惑うに違いない。もしかすると皆もう被曝を受け入れて暮らしているのか?。そう思いながら持っているマスクを、自分だけの違和感からポケットにしまいこみ、周囲に気付かれないようにガイガーカウンターのスイッチを入れてみる。すると10秒もしないうちにアラームが鳴り出す。外国製のガイガーカウンターは、チルノブイリ被災地用と同じく0.3マイクロシーベルト/時の鳴り出すように初期設定してあるところが多いからだ。やはりここは危険な場所のはずだ。ますます混乱した頭で、目の前の光景が現実のものと思えなくなるだろう。

福島を訪れ、街中を見物しただけで、他人に現地を見てきたなどと今は言わないほうが賢明だ。昨秋以降、福島は気味の悪い静けさに包まれている。子どもたちは積算線量計を首から提げて生活し、テレビのニュースには各地の放射線量と風向き予報が流れ、書店には汚染マップが並び、食料品売り場にはベクレルモニターの写真と測定ファイルが置かれている。けれども、誰も放射能や避難の話をしていない。口を閉ざしたまま、いった

い何を考えているのか、傍目には分からない。

昨年の夏には町中のそちこちで放射能」の話題が大声で飛び交い、飲食店でもスーパーマーケットでも職場でも「避難」の言葉が耳に飛び込んできた。人々の心の中で起こっている出来事が、誰の目にも分かた。サマーキャンプ、母子疎開に10万人以上の人が動いた。いわば「大騒ぎ」の避難騒動だった。この半年で何があったのか? 山々に降り積もった放射能は田畑に流れ込み、ついに

お米からも暫定基準をはるかに超えるセシウムが観測された。放射能は住宅地へも移動してきていた。除染してきれいになったはずの側溝から再び0.3マイクロシーベルト/時を超える土砂が多数発見された。廃棄物は行き場を失い、除染は中断している。被害調査、健康管理調査(は行政や医師らによるサボタージウム測定)にならず、調査票の回収は2割にかなっていない。私たちはこの1年、福島に留まりながらその様子を見てきた。普通に暮らしているのではない。普通の顔をして暮らしているのだ。人々の心に慣れや諦めの感

情が芽生えたとしても、誰もそれを責めることはできないだろう。しかし、それは福島の一面でしかない。私たちは今日も我が子を守るつと、模索と努力を続けている。いま静かに親たちの行動は次のステージに入るところにしている。

新たな芽生え、保養と移住

2月11日、福島市内で放射能からいのちを守る全国サミット」が開催された。全国から50以上の避難受け入れ支援団体、自治体が一堂に会し、約400人が参加して事例報告やシンポジウムを行った。県内からの参加者は少ないだろうと思われたが、蓋を開ければ4割が地元の人だった。2日目の相談会は50ブースが並び、主催者から相談者を奪い合わないよう「と」シヨク交じりのオープンングだったが、来場者は200組を超え、人気ブースでは昼食もとれないほどの大盛況だった。

相談の中心は「保養」企画だ。まだ迷いの中でありながら、せめてもの対策、被曝低減と体力回復を求めて、人々は保養ブースを訪れていた。保養ですべてが解決すると思っ

わけではない。本当の解決への出口を模索しながら、今できる精一杯のことをして、救済を待つという姿だった。

救済、それは日本政府によるものだろうか？むしろ素直に「神」と言うほうが嘘がないだろう。避難にせよ、除染にせよ、日本政府のどこまで態度は福島棄民政策だ。私たちはそれは分かっている。避難政策の拡充もせず、自助努力に任せたままだ。いま行われている除染は、住民流出を防ぎたい自治体による「モンストレーション」に過ぎない。電気も食料も供給できない福島は、もう用無しとでも言いたいかのようには、日本政府は本質的な解決策をとろうとしない。政府も神も救わないのなら、自ら決断して行動に移すしかない。

相談会ではもうひとつの芽があった。移住「である。閑古鳥が鳴くはずの移住相談ブースに人が訪れていた。行動を起こさなければ結局は何も変わらない、私たちが夫婦も変わらない」「子どもがもうすぐ3歳になる、きょうこも家の中ばかりには置けない」「それぞれが1年間の思索の結果に近づいていた。保養ブースでも、

先の移住も見据え、場所の選定と下見を兼ねた相談が少なくなかった。

福島の中でも一部の人はこの動きを知っている。管理職、不動産業者、越業者などの人たちだ。ある日突然、人目をばばかり、部下から「3月まで退職」を申し出られる。理由は「身の都合」、それ以上は聞かなくとも分かる。なぜなら小さな子どもがいる社員ばかりが申し出てくるからだ。賃貸住宅は県の借り上げで逼迫してきたが、4月には空きが出そうだと聞く。出入りのバランスが例年とは違っているらしい。3月末の引越料金の相場はまだまだ吊り上がるので、決して値打ちを出さない。

行政では福島市が、震災後に人手不足を訴えている障がい者ヘルパー派遣事業所にマンパワー実態調査を行い、1割以上が今後さらに人材不足になる見通しを持っており、その一番の理由が「原発事故による移住」等であることを明らかにした。人知れず静かに、福島市の親たちは次の行動を起こし始めている。

私事で恐縮だが、私たちが家族もこの春に移住することを決めている。昨年3月から西日本に疎開している

妻と子どもたちと、北海道で合流して新しい暮らしを始める予定だ。福島を棄てようとする力に抗い、行動してきた1年だったが、今度は私たちがたくさんのものを福島に置き去りにしなければならぬ。私たちに就いて容易な決断ではなかった。私たちが家族は既に「福島人」として生き始めている。特別な人生を生きたいことになる。「福島人」。子どもたちにもその自覚が芽生え始めている。自ら誇りを持って「福島人」と名乗れる人間に育てること、それは私たちが夫婦の責任である。

〜福島人の生まれ変わりから〜

原発事故被災者のための恒久法制定の動きが、法律家や市民の中から今年に入り出てきた。待望の動きである。その柱は、被曝者の健康管理と医療の実施、選択的避難区域の設定と移住者支援など避難の権利確立、汚染地域に留まる者の保養の権利になる。健康被害の究明や賠償の完全実施と合わせて、今年の最大目標にしたい。日本政府と東京電力、そして原子力に巣食う強欲者たちに、きつちりと責任を取らせなければならぬ。

全国サミット「実行委員会」は、発展して全国協議会化する方向で準備が進められている。保養と移住を二本柱とする市民イニシアチブに、私も参加していきたい。原発事故を契機に、露になったこの日本の本当の姿。何度も絶望しかけた中で、いのちを守るために繋がり合った市民の活動は、私たちの未来への励ましと希望であった。この日本を心底から作り変えていくための、もっと大きな力となるよう成長していきたい。

もうひとつ、私には目標がある。それは福島原発事故で被災した当事者としての運動をしていくことだ。私は長い間、福島の障がい者団体で働いてきた。自分の意思とは無関係に、入所施設や家族の下に押し込められてきた障がい当事者が、自らの意思で自分らしい生活を作り出す自立生活運動から、たくさんのことを学んできた。障がい者同士のピアカウンセリング、ロールモデルとして身を晒し、仲間を力づけていくエンプワメント、それは人から人への魂の伝承であると同時に、マイノリティーから始まり万人にとつての共通価値となる、イン

クルーシブな文化を創出する運動でもあった。3・11以降に私がしてきた行動の源は、障がい当事者運動の中で得てきた力が大きかった。これからの私にとって、ますます大切なものになっていくだろう。

“福島人は生まれ変わらなければならぬ。福島の再生こそ私たち福島人の願いであり、子孫への責任である。10基もの原発建設を許し、40年ものあいだ運転を容認してきた、過去の福島人のままでは、福島は完全に使い棄てられてしまうだろう。遠い将来おそろしく数百年後であろうが、もう一度福島が再生するためには、私たち福島人が生まれ変わり、新しい福島人の文化を創り出していくことが必要だ。それは当事者である私たち福島人にしかできない。”

障がい当事者運動

後藤由美子

を核の「///捨て場にさせない」と、子どもたちに胸を張って語り継げる生き方をすること。その先に新しい福島が透けて見えたなら、叶うことなら死ぬ前にそのビジョンを見られたら、きこく私の本懐だと思つ。

28年前だったと思つ。脳性マヒの人が家族から離れ、独り暮らしをしているアパートへ介護に行った。今でも、多くの人が脳性マヒの人と接する機会がなく、ある大学の学生にアンケートをとったら、約半分が脳性マヒは知的にも障害があると思つと答えたそう。ご多聞にもれず可哀想な人のお手伝いをするつもりで行った私は、その人の生き様に触れて、価値観がひっくり返った。自分の人生を生きるのに、いのちがけた。何の制度もなかった当時は介護者を見つめるマネジメントは真剣勝負だった。見つからなければその間は一人、何も飲めず食べられず、トイレも行けず、寝返りさえ打てず、何かあっても逃げ出す事もできず・・・という時間となる。家へ帰ればそういうことはないかもしれないが、ほと

んどの場合かこの鳥となる。それは家庭が「健全」者の価値観でできあがっていたからだ。迷惑をかけてはいけないという一言で封印される障害者の意志、気持。そこからまず離れることが自分の人生を始める一歩となったとしても不思議ではない。しかしそのハードルの高さはどうだろう。その高さを越えさせたものは何だったのか。自分は何をして生きているのか、自分の人生を生きているのか、その人の突き抜けた明るさに、かわいそうなのは自分の方だと感じた。身体的には何でもできるのに、狭い世界で縛られて身動きできないで自己否定。それを打ち破ることができないのだ。人の幸せって何だろうと思つた。

日本人を幸せにしない日本というシステムという本があるようだが、その底辺を生きた人々が、そこに流れていた思想の歴史とも合流し、障害者解放運動という根源的な問いの運動を社会に表現して半世紀を迎えつつある。私たちの社会が今持っている、誰にとってもセーフティーネットとなる福祉制度を作りだした大きな力の一つとなった。数年前、その先駆者である70代の自立障害者

の3人を撮ったドキュメンタリー「こんちゅうしょう」を見た時、まさに中手聖一さんが言われる「ロールモデルとして身を晒し仲間を力づけていへ」エピソード、それは人から人への魂の伝承であると同時に、マイノリティから始まり万人にとつての共通価値となる、インクルーシブな文化を創出する運動」としての可能性を感じた。生き辛い社会が極まってきたからだ。しかしここまでひどいことになることは想像もつかなかったが。。

障がい当事者運動が明らかにしたことが、今このように形で、史上最悪の核汚染を引き起こし、起こし続ける私たちの社会に、すべきことの道筋を与えつつあることに納得する。そしてこれから核汚染の被害を生きる私たちの社会を、決して悲惨なものにはしない希望もそこにはある。地獄は一定すみかぞかし 歎異抄



何から手をつければ良いか雲をつかむような話だが、目の前のことから始めていきたい。子どもたちを放射能から守ること、仲間たちと励ましあい生活を再建すること、時流に押し流されずに新たな希望へ踏み出すこと、事故を一度と繰り返さぬようすべての原発を止めること、福島